

学位請求論文の内容の要旨

領 域	看護学領域	分 野	
氏 名	工藤 千賀子		
(論文題目)	患者のセクシュアリティに対する看護者の態度と行動に関する研究		
主 査	石川 玲		
副 査	高見 彰淑		
副 査	木立 るり子		
副 査	工藤 せい子		
<p>【はじめに】</p> <p>人間は性的な存在であり、ヒューマン・セクシュアリティ（以下、セクシュアリティ）とは、生涯を通じて人間であることの中心的側面をなすと言われている。看護において、その対象者を全人的に理解しようとするときに、セクシュアリティは重要な側面であると言える。看護学におけるセクシュアリティをテーマとした国内外の研究結果はいずれも、看護師はセクシュアリティを話題にできにくい現状を報告している。話題にできにくいという結果から、看護者は自分自身の性意識を同一化し、恥ずかしいという感情を持ち、患者の性に関するひとつの要素に過ぎない「性行為」に対して、患者に同情していることが考えられる。つまり、患者のセクシュアリティに対して、看護者は、Schelerの共感論による感情伝播とその極限と言われている一体感を起こしていることが考えられる。</p> <p>本研究では、DeFleur & Westie（1958）による、態度とは行動を生起する先行要件であるという知見に基づき、患者のセクシュアリティに対する看護者の態度と行動の関係を明らかにする。</p> <p>【研究Ⅰ 筋ジストロフィー患者のセクシュアリティに対する看護者の態度と行動】</p> <p>〈背景・目的〉筋ジストロフィー患者は、症状の進行に伴い、第二次性徴が出現する思春期の時期を施設内で過ごさざるを得なくなったり、施設に入院することによって婚姻による性生活を中断せざるを得ない状況が起こる。Kieny（2013）らは、筋ジストロ</p>			

(注) 論文題目が外国語の場合は、和訳を付すこと。

【細則様式第1-2号続き】

フィー患者に満足のいくQOLが保障されるべきである、と述べている。本研究は、筋ジストロフィー患者のセクシュアリティ（性的言動）に対する看護者の態度と行動の関係を明らかにすることを目的とする。

〈方法〉調査対象者は、筋ジストロフィー患者が入院している病棟を有する全国の26施設の内、7施設の看護師と介護士である。質問紙調査法とし、調査内容は、態度を測定する尺度として、鈴木による「平等主義的性役割態度スケール短縮版（The scale of egalitarian sex role attitudes - a short-form : 以下、SESRA-Sとする）」と、行動を測定する尺度として、大出による「倫理的行動尺度」を用いた。

〈結果〉159部回収（回収率36.6%）、有効回答157部（有効回答率98.7%）を分析対象とした。「SESRA-S」は、女性 57.53 ± 6.16 、男性 53.92 ± 7.76 で、女性が有意に高かった（ $p < .05$ ）。「SESRA-S」と「倫理的行動」との相関は $r = .31$ （ $p < .001$ ）で弱い正の相関があり、看護師と介護士の2群間で差はなかった。ケアする者が看護師であるか否かに影響する変数として、多重ロジスティック回帰分析を行い、変数の選択は尤度比検定による変数増加法を用いた結果、教育課程、子どもの有無、職務経験年数、筋ジストロフィー患者の援助経験年数が選択された。

〈考察〉対象者の「SESRA-S」と「倫理的行動」の間に弱い正の相関を示したことは、筋ジストロフィー患者をケアしている看護者が、男女は平等であるという平等主義的信念を持っていることと、倫理的行動を認識してケアしていることに関連があることを示唆している。ケアする者自身が自己の倫理的行動の認識を評価したり確認することによって、気づく力が養われた結果、患者のセクシュアリティに関するケア場面において、倫理の基盤をなすケアリングを倫理的行動と関係づけ（Fry, Sara T. 1998）、患者の性差よりもひとりの人間として認識してケアしていると考えられる。多重ロジスティック回帰分析の結果、看護師か否かに影響する独立変数に性役割態度が選択されなかったことは、筋ジストロフィー患者をケアする看護者に共通した傾向を持つと考えられる。すなわち、看護者が倫理的行動の認識を高めることによって、患者をひとりの人間として理解してかかわることになり、患者のセクシュアリティを尊重したケアができると言える。

【研究Ⅱ 看護者が患者からセクシュアルハラスメントを受けた実態および看護者の態度と行動】

〈背景・目的〉セクシュアルハラスメント（以下、セクハラ）は、相手の意に反する性的言動によって、働く上で不利益を被ったり、就業環境が妨げられることを言う。医療現場において、看護師のセクハラに関する研究報告は数多くみられ、看護師のセクハラ体験は海外では57%であり、日本では54.2%、55.8%とも言われ、看護師は受動的かつ控えめに反応し、患者を止めようとはせず、適切な監督者に報告されることは少ないと言われている。本研究は、看護師者が患者からセクハラを受けた体験と看護の態度と行動の関連を明らかにすることを目的とする。

〈方法〉調査対象者は、東北6県の100床以上の病床を有する110施設の内、34施設の看護師とした。質問紙調査法とし、調査内容は、研究Iと同様の尺度を用いた。

〈結果〉回収は840部（回収率45.5%）、うち有効回答834部（有効回答率99.2%）を分析対象とした。看護師が患者からのセクハラを体験した割合は、62.6%であった。体験有群・無群の2群間で「SESRA-S」と「倫理的行動」の各得点に有意差はなかった。また、「SESRA-S」と「倫理的行動」で、有意水準1%で体験有群・無群とも $\rho=.302$ と弱い正の相関があり、セクハラ体験の有無に関わらず、平等主義的性役割態度と倫理的行動力が高まることとの間に弱い正の関係があった。

〈考察〉金谷が、伝統主義的な性役割態度を有する者はセクハラを認知しづらく、逆に平等主義的な性役割態度を有する者はセクハラを認知しやすいことを、また、看護師のセクハラ防止対策に関して、Hibinoらは、男女平等に関する教育は日本の病院看護師のセクハラを減らすための長期的な解決策であると報告し、性役割態度に対する教育がセクハラの解決策であるとされてきた。しかし、今回、セクハラ体験の有無と看護師の個人的要因である性役割態度との関連はみられなかった。セクハラの本質には、ジェンダー・ハラスメント問題があると言われている。ジェンダー・フリーの観点から、看護師自身が女性または男性であるという生物学的性を問わず、プロフェッショナルな人間として、同様に人間である存在の患者に淡々と対応することによって、患者からのハラスメントを受けるリスクを減らすことが可能であると考えられる。

【まとめ】患者のセクシュアリティに対する看護師の態度と行動は、療養介護病棟において生活する筋ジストロフィー患者をケアする看護師に特徴的であるとは言えず、一般病床における看護師と共通した傾向がみられた。看護は、男性とか女性とかのレベルではなく、一人の人間として、他者である患者との良好な相互関係を維持していくことが、患者からのセクハラ被害を防止する一つの策になり得ると考えられる。

【細則様式第 1 - 2 号続き】

学位論文のもととなる研究成果としての筆頭著者原著

論文題目	Nurses' sex-role attitudes and ethical behavior toward the sexuality of muscular dystrophy patients
著者名	Chikako KUDO, Seiko KUDO
掲載学術誌名	Journal of Japan Society of Nursing Research
巻, 号, 頁	42 巻, 5 号, 851-860
掲載年月日	2019 年 12 月 20 日